

よく手入れされた庭園でテーブルにつき、薫り高い紅茶と共にフルーツケーキを口に運ぶ。格式ばったお茶会ではお菓子の味なんてわからないけれど、気の置けない友人だけの集まりとなれば話は別だ。女子だけの集まりとなれば自然と恋愛話の花が咲く。わたしは居心地の悪さを感じながら、にこやかに相槌を打つ。こちらに話題を振られないことを願っていたが、それは叶わなかった。

「そういえば、ミアはディートリヒ様とはどうなの？　もう結婚も秒読みだって噂だけだ」

恋人の名前を出されてわたしは眉をわずかに寄せた。ディートリヒは今をときめく宮廷魔術師だ。穏やかそうな黒曜石のたれ目で整った顔。少し癖のある深い夜を切り取ったような群青色の髪を肩より上で切りそろえている。

彼は魔術師としては非常に優秀だったが、それに比例するように性格が歪んでいた。温和そうな顔をして、物言いは冷徹でずけずけと刺々しく、女性を楽しませることに長

けている人物ではない。だが、前途有望で見た目も悪くないとなれば、令嬢たちが熱を上げるのもわからないではなかった。

わたしは紅茶を一口飲んでから口を開く。

「どうなの、と言われても……。どうしてあの人わたしに執心なのかわからないわよ。それに、結婚なんてあちらが勝手に言ってるだけだもの」

「もう、そんなつれない言い方をして。あの女嫌いの方があなたに夢中なんだからもう少し喜べばいいじゃない。それにミアのお父様が元気になったのもディートリヒ様が開発した魔法薬のおかげなんですよ？」

友人の一人がぶくつと頬を膨らます。昨年、大病を患った父は、あらゆる伝手を頼って治療を試みたが、どの医者や魔法使いからも匙を投げられた。幼い弟妹のためにも、父によくなってもらいたかったわたしは薫にもすがる思いで天才と評判のディートリヒのもとを訪ねた。王族のために開発した新薬を、彼はある条件でわたしに譲ってくれた

のだ。確かに彼女の言うとおり、わたしは彼に恩がある。けれども、わたしとしてはもう義理は果たしたから、これ以上関係を続けるつもりはない。わたしはあの陰險な魔法使いと別れたくて別れたくて仕方ないのだ。

「あの人の周りにいままでいなかった性格の女だから珍しいだけよ。早く解放してほしいわ」

「またそんなことを言って、照れ隠しも度が過ぎると嫌味っぽいわよ」

友人は呆れたようにわたしを見る。周囲がいくら彼を前途有望だと説得しても、わたしの気持ちは揺らぐことはない。一刻も早くあの陰險な恋人と縁を切りたいのだ。

宮廷の奥深く、王族たちのお気に入りのお貴族たちが私室を与えられている一角にディートリヒの部屋はある。

「ディートリヒ、今いいかしら」

返事はなかったが扉を開けて中に入ると、むせ返るような薬草の臭いが鼻をつく。初めてこの部屋に連れてこられたときは臭いだけで頭が痛くなりそうだったが、随分と慣れてしまった。

壁に所狭しと並んだ本棚には隙間なく本が敷き詰められ、部屋の奥には様々な魔法薬の材料となる乾燥させた植物が瓶に詰められて並べられている。研究と仕事のことだけを考えてこの部屋にいるのだろう。机にかじりついている彼に声をかければようやく訪問者の存在に気づいたみたいだ。

「ミア、来ていたのか」

「ええ、ごめんなさい。忙しいのに邪魔をして」

「いや構わない、ちょうど休憩しようと思っていたところだ。座って待っていてくれ」
彼はわたしを応接用のソファーに座らせると、奥の部屋へと入っていく。以前王子と交流のある令嬢が漏らしていた愚痴では、王子が部屋を訪れても振り返りもしなかった

ときくが、なぜかわたし相手には手を止めてくれる。

「すまない、待たせたな」

彼は銀盆の上にカップとポットを乗せて戻ってくる。小さな皿にちよこんと丸いマカロンが載っている。わたしの好物だ。彼は甘いものをあまり食べないから、誰のためにわざわざ用意していたのかは明白だけれど、こんなことで心を許してはいけない。いつも難しい顔をして、眉間に皺を寄せているディートリヒの表情が少しやわらかい気がするのもきつと気のせいだろう。

「いらないわ、妙な葉が入っていたら困るもの」

彼が少し傷ついたような顔をしたけれど、気が付かないふりをした。

「それで、今日は何の用だ」

彼は向かい合ってソファアに座ると銀盆を脇に置いて話を促す。わたしは紅茶とお菓
子に手を付けることなく本題を切り出す。

「別れてほしいの、報酬は十分払ったでしょう？」

報酬、というのは病床の父を治療してもらうために彼に捧げた貞操のことだ。父を助けたいのならば、令嬢が守らねばならぬ純潔を捧げろと脅され、わたしはディートリヒに体を売った。誰も知らなかった身体をこじ開けられ、娼婦でも口にするのを憚るようなことをされて散々身体を弄ばれたと思ったら、彼はのうのうと父母にわたしを娶りたいと直談判しに来たのだ。

「ミアは俺が嫌いカ」

「別にそうは言っていないでしょう。好きでも嫌いでもないわ。わたしはあなたに身体を捧げて、おかげで父は元気になった。これで終わり。だからこれ以上、あなたと床を共にするつもりはないといっているの」

「だが、キミのご家族は全員賛成しているぞ」

ディートリヒが食い下がってきて、わたしは拳を握りしめた。人がせっかく穩便に別

れたいと申し出ているのに、恥ずかしげもなく拒否する男が腹立たしい。

「それはあなたがわたしにした、口にするのもおぞましいことを知らないからでしょ」

そう答えると彼は不満そうに眉をひそめる。わたしの答えが気に食わなかったらしい。

「そもそもなんでわたしなの？ あなたを好いているご令嬢なんてたくさんいるでしょうに。おかげで世間ではわたしとあなたが結婚秒読みなんて噂が立っているの。困るのよ」

「やれやれ、ずいぶんと嫌われたものだ」

そう言うとき彼は髪をくしゃりとかきあげて嘆息する。そしておもむろに立ち上がりわたしの手首をつかむと、乱暴に壁際に追い詰めた。

「ちょっと！」

抵抗するものの男の力にはかなわない。じたばたと暴れていると、彼が呪文を口にならせる。その不思議な声の揺らぎを耳にした途端、身体に力が入らなくなる。

「つつ、……魔法を使うなんて卑怯よ」

「キミが言うことを聞かないからだろう。別に力づくでも構わないが、あまり手荒なことはしたくないからな」

ディートリヒはわたしを抱き上げると、柔らかなベッドの上に下ろす。困惑と不安に見上げると、覆いかぶさる男の姿が影を落とす。

「キミがおとなしく俺と恋仲になってくれると約束してくれるなら、すぐにでも解放してやる」

「だが、あなたなんかと」

ディートリヒは鼻で笑うとわたしの耳に舌を這わせた。彼はわたしを抱くとき、決まって耳を愛撫する。無理やり暴かれた身体なのに、ぞくぞくっ♡と背筋が震える。

「まだ耳しか触っていないというのに、ずいぶんと期待しているようだな」

かっ顔に熱が集まる。反論しようと口を開く前に、ディートリヒの舌が耳の穴にね

じ込まれる。くちゅくちゅ♡と唾液が絡む音が直接脳髄に響き、びくびくと腰が震える。
いやなはずなのに、快楽に支配された記憶が蘇って、きゅんっと奥がうずきだす。ひく
ん♡と秘部が収縮するのがわかった。

「ふあ♡♡♡やめて♡♡♡」

「本当に嫌なら抵抗すればいいだろう。もしや、呪文は必要なかったかな？」

彼が不思議な言葉を呟けば、身体に力が戻っていく感覚がした。彼を押しつけて、部屋を出なければいけないのに、ただ喘ぎながら震えることしかできない。

「いや、離してえ……♡」

「そんなに可愛い顔をして言われても、説得力がないな」

自然な流れのようにドレスのボタンを外されて、胸だけ露出させられる。白い双丘を守る布をずらされれば、ぷるん々と桃色の先端が顔を出す。慎重しやかだった乳首は、散々弄られたせいで、男を知らなかったころよりも一回り大きくなってしまった。

「ふん、いやらしい乳首だな。とてもつい最近まで処女だったとは思えない」

きゅっと胸の突起をつままれて、わたしは喉をのけぞらせる。ぐりぐり♡と先端を押しつぶされて、痛みと快楽がごちゃ混ぜになる。こんなに手荒に触られて、気持ちいいなんて屈辱でしかない。

「いやあっ……いたいからっ、やめてえっ！」

声を上げて睨みつければ、ディートリヒの手つきがかわった。

「そうか、ではお望みどおりに優しくしてやろう」

ディートリヒがわたしの乳輪の周りをくるくるとくすぐるように撫でまわす。じんわりとした快感が胸から腰にじわあっと広がって、もどかしくて仕方ない。なにをされても気持ちよくなろうとするカラダが、おそろしいのに肌はどんどん過敏になっていく。

「あ……んっ、はあ……♡卑怯者っ、抱くなら早く抱きなさいよ……っ♡♡」

「まったく、堪え性のないことだ。キミのそういう淫らなところも気に入っているがな」

「ふ、ふざけないで、みだらなんかじゃないわ。あなたが妙な魔法でも掛けたにきまつて……、んんっ♡」

彼は胸に顔を近づけると、固くなった乳首をべろりと舐め上げる。待ち望んでいた快楽に身体が歓喜するように背筋が伸びる。けれども、敏感な先端の表面を舌で掠めるように舐められただけ。それだけじゃ満足できないとでも訴えるように、わたしの腰はゆるめいてしまう。

へこ♡へこ♡

無様なのに、勝手にカラダが動いてしまう♡ディートリヒの舌に胸を押し付けるように背中をそらして胸を張って、おっぱいでディートリヒの顔を挟み込むかのように押し付けてしまう♡

「どうした？ そんなにおねだりをして」「っ、おねだりなんて、してないっ……」

顔を上げて、意地の悪い笑みを浮かべる男にわたしは唇を噛む。頬が双丘に擦り付けられると、やわらかい髪が触れてこそばゆい♡まるで恋人のように振舞う男を、思い切り殴ってやりたいくらい憎らしいのに、じんじんと疼く乳首のもどかしさを無視できない♡いやらしくピンピンに勃起した乳首の先っぽを痛いくらいに思いきり押しつぶしてほしい♡♡ディートリヒの舌で弾いて、翳ってほしい♡♡ぢゅっ♡ぢゅう♡って下品な音を立てて吸ってほしい♡

「どうしてほしいんだ？ 望んでいることをいつてみる」

「きやうっ♡」

乳首をぎゅっと摘まんで、でも一番大好きな先端には触れてくれない。すこしくぼんでるところを弱弱しく爪を立てられる。そのまま強くしてほしい、期待に顔を見上げれば指は離れて行ってしまう。カリっ♡カリっ♡と爪で引っかかるけれど、表面だけなぞるように引っかかれても気持ちよくなれない♡

「やっ……あっ♡ちがっ♡♡」

もっと強くしてほしい♡気持ちよくしてほしいのに♡♡♡

「違う？ キミの望み通りにしているつもりだが、これ以上どうすればいい？ ん？」

うっすらと軽薄な笑みで微笑みながら、ディートリヒがわたしの顔を覗き込む。恥ずかしくて、目頭が熱くなる。堕ちてくるのをいまかいまかと待ちわびられながら焦らされて、屈服するのはつらい。でもカラダはもっともっと気持ちよくなりたいって疼いて、わたしの理性を蝕んでいく。とうとう逆らえなくなつて、わたしは観念して口を開いた。「くっつ、さきっぱ♡いやらしくふくらんでっ、ぷくってなつたわたしのちくびのさきっぱ、いっぱいカリカリつて♡ひっかいてえっ♡♡」

その言葉を待っていたかのように、彼は激しく乳首を引っ掻く。乳頭をぐに♡と乳房に押し込むように、思い切り爪が食い込んでいく♡待ち望んでいた強い快楽にわたしは喉を反らして喘ぐ。

「デ♡ん♡ん♡お♡♡カリカリしゅき♡♡これすき♡♡」

ビク♡♡ビク♡♡ガクガク♡♡

乳首を刺激されているだけにカラダを痙攣して身もだえるわたしを見て、ディー
トリヒが微笑む。

「キミは敏感だな♡これもすきだろう♡」

食い込んでいた指が離れて、今度は乳首を伸ばすようにぷくと肥大化した乳首をぐ
いぐいと引っ張られる♡ディートリヒが与える刺激に合わせて身体がビクビク♡♡とし
なる。

「ば♡ぐ♡♡♡あ♡あ♡♡開発済み乳首ひっばられたら♡♡イク♡♡♡イツちゃう♡♡
♡♡♡」

また乳輪が大きくなってしまわないかと錯覚するくらい引っ張られて、わたし
は絶頂を迎えた。

「おーっ♡はーっ♡ん……っ♡♡ふ……っ♡♡はあ♡」

絶頂の余韻に体をヒクつかせていると、ディートリヒの手がスカートの中に侵入してくる。器用に足の間に入り込み、下着の上から割れ目をなぞられる。くちゅっ和水音が響き、愛液で下着が濡れていることを教えてしまう。

「まだ胸しか弄っていないのにこんなに濡らしていやらしいな」

「いやっ……ちがうの……これはっ」

「何が違うんだ？ ほら、よく聞こえるだろう。まるで漏らしたみたいだな」

長い指を動かたびに、ぬちゃっ♡にちゃっ♡と粘着質な音が部屋に響く。そのたびに羞恥を煽られて、わたしは顔を赤らめる。

「——っ♡♡……」

「ミアは淫乱な女で、俺に調教されたからこんなに感じてしまっているのだろう？」

耳元で囁かれる言葉に頭の中がぐちゃぐちゃになる。愛液でショーツはべったりとお

マンコに張り付いて、淡い生地のものからは飾り毛が透けて見えた。もはや下着としての用をなしていない。シルク越しに恥丘をなぞられると、くちゅくちゅっ♡♡と粘ついた音が響き渡る。ショーツ越しに泡立った愛液がディートリヒの指を濡らしていた。見せつけるように指を擦り合わせれば、糸を引いた粘液がいやらしく光る。

「ほら、こんなにキミの身体は俺を求めている」

信じがたい欲求が、わたしの頭を支配していく♡もう屈服していいから、早く気持ちよくなりたい♡♡ぴょこつと頭をもたげているクリトリス、コリコリされながら、指でおマンコズポズポされたい♡♡

「ふっ♡うづ♡」

どうせ堕ちてくるとバカにされているのに♡抗いたいの♡頭がおマンコに支配されちゃってる♡吸い寄せられるように舌を伸ばして、愛液がてらてらと光る指を舐めて、湿った息で呼吸しながらディートリヒの顔を見上げる。

「おねがい、もう、げんかいなのぉ♡調教済みの淫乱女でいいから、気持ちよくして♡」
とんでもないことを口走りながら、はしたなく足を開けば、女の匂いがむっと立ち込める。本気で欲情していることをいやというほど示しているカラダが男を誘っている♡
ドレスをたくし上げて懇願するわたしを静かに見下ろす。こんなに屈辱的に媚びているのに。彼はわたしの欲しいものをすぐに与えてはくれなかった。

「本当に触ってほしいなら、下品なカエルのように足を開いて媚びろ。できるだろう？」
「——っ♡♡」

羞恥に赤くなる顔を俯かせる。こんな男の前で秘部を見せ、快楽をねだるなんて許されない。と理性は叫んでいるが、もうわたしの身体は限界だった。

「こ……こう？」

両腕で足を抱えて、大きく足を開く。ぷるぷる♡と震える媚肉も、とろとろと蜜をこぼすおまんこも丸見えだ。恥ずかしくて死にそうだけれど、それ以上に快楽が欲しい。

あの長い指で、根元をきゅっと掴まれて、クリトリスをシコシコってされたい♡♡

「ずいぶんはしたないポーズだな」

彼が下着に手をかける。ショーツを下ろされれば、むわっと湿った空気が溢れる。冷たい外気に触れておマンコがきゅん々と疼いた。

「さて、これからどうしてほしいんだ？」

「っ、ここまで恥ずかしい真似をさせておいて……！　まだわたしをコケにするつもりなの？！」

わかってるくせにこの男はっ♡♡わたしの口から言わせたいんだ。本当に最低な男♡♡

だいつきらいなはずなのにお腹の奥がきゅんきゅんとうずくを感じる。彼に仕込まれた身体は快楽に従順で、貪欲に次の刺激を待ちわびている。

「おねがい……わ、わたしの下品なクリチンポ触って……いっぱいシコシコしてっ

♡♡♡エッチなお潮いっぱいビュービューっ♡っ♡♡」

強要されたわけでもないのに、下品な言葉を並び立てて媚びる自分に泣きたくなる。

でも限界まで焦らされて、抗えない♡

馬車の窓から顔を出して身を乗り出そうとする弟の身体を慌てて抱く。こちらの心配も知らずに小さな手足をばたつかせる弟に苦笑した。

「ほら、危ないからちゃんと座りなさい」

「あねうえ、やーはなして！」

聞き分けのない弟を無理やり馬車に引っ張り込み、自分も隣に座る。母と父はそんなわたしたちを見てのんきに笑っている。窓から吹き込む風は気持ちよく、無邪気な弟妹たちほどではないが、心が浮足立っていく。

避暑地への家族旅行は久しぶりで、今日はなんだかうきうきしてしまう。この旅のために仕立てたドレスを着せた妹もかわいらしくて、久しぶりに心が安らいでいった。

「おにーさま、おねーさま！ おそとがきれいです！」

妹の無邪気な声につられて、わたしは馬車の外を覗く。光をきらきらと反射する湖には、ボート遊びに興じる家族が見える。はやく自分たちもボートに乗りたいと駄々をこ

ねだす二人をわたしはなだめた。

「まず別荘について、荷物を置いてから遊びましょうね」

平和な日常に、口元がほころんでいく。ディートリヒに快樂を教え込まれる日々からは夢のような光景だった。淫紋を刻まれてからというもの、わたしは毎晩のように体を求められて、娼婦ですら口にするのを憚るであろうおぞましい性技を教え込まれていた。つかの間の開放ではあるけれど、これから一か月ほどは彼の顔を見なくていいのだ。

避暑地へ訪れることを話すと、ディートリヒは意外なほどあっさり許してくれた。てつきり、自分だけは都に残って毎日ディートリヒに奉仕することを覚悟していたので、拍子抜けしてしまった。

彼の顔をしばらく見ないでいいことがこんなにもうれいなんて、彼を好青年だと勘違いしている両親には口が裂けても言えない。

そんなことを考えながら、わたしは心地よく揺れる馬車の揺れに身を任せた。

屋敷の門の前で馬車が止まれば、管理を任せている使用人たちが出迎えてくれる。

別荘の管理は、父が直々に選んだ信頼のおける人間に任せていた。おかげで主人不在の間もチリ一つなくきれいに保たれている。さっそく部屋に入ろうとしたところ、父母が神妙な顔をしてわたしに声をかけてきた。

「ミア、こんな風に家族でなんの憂いもなく旅行を楽しめるなんていつぶりだろうな」

「ええ、本当にあなたは長女としてよく家のことを考えてくれて、感謝しているのよ。」

弟と妹の面倒もよく見てくれて、苦勞も掛けて」

「あねうえはいつもがんばっててえらいです！」

「あねうえ、いつもやさしいからすきー！」

唐突に向けられた家族からのねぎらいの言葉に戸惑いながらも、わたしは面映ゆく微笑む。

「どうしたの、みんないきなり」

わたしが照れたのを見て、家族はいっせいに顔を見合わせて笑い出す。

「いつも頑張っているミアに、どうかして肩の荷をおろしてもらいたくてね」

「ああ、いろんなところに手を回してお願ひしたんだよ」

父母に手を引かれ、わたしは来客用の部屋の前へと連れてこられる。

「ここは？」

「いいから、開けてみて」

言われるがままに部屋を開ければ、そこには見慣れた人間が座っていた。ディートリヒだ。わたしは驚きに息を詰まらせた。

「ディートリヒ、どうしてここに？ あなたは王宮で仕事してるんじゃない……」

わたしの疑問に父が答える。

「ディートリヒはミアの婚約者なんだ。いずれ家族の一員になるんだから、ここにいても不思議じゃないだろう。弟と妹のことはわたしたちと使用人にまかせて、若い娘らし

く恋人との楽しんでおいで」

冗談じゃない。二人きりになんてされたら何をされるかわかったものではない。

「そんな、彼は忙しい方なのにわざわざ呼び出すなんて……。宮廷が回りませんわ」
遠まわしに早く帰ってほしいと訴えるが、父はニコニコと笑うばかりだった。

「まったく、あまり照れるものではないよ」

「照れてなんて、お母さまもなにかおっしゃって」

助け舟を求めた母にも、わたしの意図は伝わらなかったようだ。年頃の少女のように声を弾ませてわたしとディートリヒを眺める。

「あらいいじゃない。あなたは普段頑張りすぎなのよ。この機会にたくさん甘えてきなさい、ほら、ボート遊びにでも行ってきたさいな」

わたしが言葉を失っているとディートリヒがわたしの腰を抱いて、微笑む。その瞬間、背筋が寒くなるのと同時に、自分の意志に反してお腹の奥がきゅうつと疼いた。相反す

る自分の身体に困惑しながら、わたしは整った顔を睨みつける。

「ミア嬢は甘えるのが不得手ですから、気恥ずかしいんでしょう。そういうところも、俺には魅力的に思えます」

両親の前で惚気て見せるディートリヒと、それをあたたかい目で見守られている。この状況に頭を抱えそうになる。

ディートリヒの視線がわたしをちらりと見やる。まるで言いたいことがあるならば言ってみろと言わんばかりの瞳だ。両親にすべてを話すこともできるはずはなく、結局わたしは言いたいことを呑み込んでしまう。

「……もう、両親の前で恥ずかしいわ。ディートリヒったら」

わたしは屈辱に震えながら、彼の腕に自分のそれを絡ませる。恋人に甘えるふりをすれば、ディートリヒはふっと口元を綻ばせる。我ながら到底演技には見えない自然な声色に感心しながらも、眉間に思い切り皺を寄せてしまいそうになるのをなんとか耐えた。

その後家族に見送られるままにボート遊びに出かけた。

湖にはデートをする恋人たちや家族連れの姿が目についた。さっそく手続きをして棧橋からボートに乗り込んでいく。先に乗り込んで黙ってわたしがボートに乗るのを待つ彼に、なぜかひどく苛々して刺々しい口調になってしまう。

「こういうとき、紳士は手を貸してくれるものよ」

「すまなかった。どうやら俺は気が利かないようだ」

ディートリヒは刺々しく責め立てるわたしに気を悪くした風でもなく、ボートに乗せてくれる。指摘されるまで気が付かないところを見るに、やはり彼は女性慣れしていないらしい。

だからわたしに執着しているのかしら疑問に思いながら横顔を睨みつける。

ディートリヒはオールを漕ぎ始める。普段机にかじりついて仕事しているからか、なかなかスムーズに進まない。

「っ、むずかしいな」

柄にもなく少し焦っている様子だった。わたしはそれを冷ややかな目で見つめる。

「あなた漕ぐの下手ね」

「はじめてだからな」

取り繕わずに明かすディートリヒに、わたしの眉間にしわが寄る。

「あなたがわたしに執着するのは初めての女だから。そうでしょう？」

あけすけな物言いに、ディートリヒは表情を曇らせた。

「断じてそんなことはない。キミはやっぱり俺を信じてはくれないのか」

「……聞の睦言なんて、信じられるわけじゃないじゃない」

身体の熱を開放するために、心無いことを、どんなに恥ずかしいことでも口走る。わたし自身がそうなのだから、ディートリヒもそうに決まっている。

「わたしのうわごとが聞きたいなら、ここで乱暴する？」

自分でも驚くほどに冷ややかな声だった。ディートリヒはひどく悲しそうな顔をして、長い溜息を吐く。

「……どうしてそんなことを。いや、俺がキミにそうさせているんだろうな」

その沈痛なつぶやきに胸の奥が痛んだ気がしたけれどもわたしは何も気づかなかったふりをしてただただ水面を見つめていた。

二人とも押し黙ったままに時間が過ぎ、いつのまにか日が傾いていた。岸にボートを寄せ、ディートリヒが先に降りて黙って手を差し出してくれた。

邪険に扱われてもボートに乗り込んだときの言いつけを律儀に守る彼に、わたしの良心がちくりと痛む。

「……ありがとう」

わたしはディートリヒの手に手を重ねて、ボートから降りる。ちらりと彼の顔を盗み見るが、視線が合うことはなかった。

お互いに言葉を交わさないままに屋敷に戻れば、なんだか門のあたりが騒がしい。近づいてみれば、使用人たちが総出でわたしたちを出迎えにきていた。

「……わたしの婚約者だからって、気を使わなくてもいいのに」

幼いころに子守をしてくれた気心の知れた使用人にそう漏らせば、彼女はそういうわけにはいかないと首を振る。

「お嬢様の婚約者の前に、旦那様の命の恩人ですもの。無下にできるはずがありませんわ」

至極もつともらしい小言に、わたしは肩をすくめるしかできなかった。

家族の団欒に、ディートリヒは恐ろしいほど馴染んでいた。父が吹っ掛ける経済や政治の話題にも、そつなくこたえてみせるし、母の冗談には控えめに笑って見せる。弟妹が行儀悪く彼にまとりついたときは、かがんで二人の会話を相槌を打った。

この屋敷のなかでディートリヒとの結婚を望んでいないのは、他ならぬわたしだけ

だった。

晚餐がようやく終わって、ゆっくりと湯船につかる。ディートリヒの顔をみているとひどくイライラしていたが、メイドたちがマッサージしてくれてようやく張り詰めていた体が和らぐ気がした。

体をタオルで拭いてもらっていると、なにか引かかる。どうも使用人たちの世話がいつもより念入りの気がするのだ。

いやな予感、バラ水を顔に吹きかけられたことで確信に変わる。

「ちょっとあなたたち、なんのつもりなの？」

思わず問い詰めたわたしに、メイド達は顔を見合わせる。

「なについて、お嬢様は客間でお休みになるんでしょう？」

「お嬢様はいつもお美しいですけど、もっと美しくして差し上げなくては」
わたしはお風呂から出たばかりだというのに、さあっと血の気が引いた。

「あなた、謀ったわね……」

シルクの薄いキャミソールと秘裂がいまにもまろびでそうなわずかな布。サイドを紐で結んだだけの頼りないショーツだけ身に着けてディートリヒがいる客間へ連れていかれた。部屋に入るなりとんでもない格好のわたしを見たからか、彼は読んでいる本を落としてそうになっていた。

「……どうしたんだ、そんないやらしい恰好をして」

いやらしい恰好と指摘されて、わたしは顔を真っ赤にした。

「しらばっくれて、あなたの差し金でしょう？」

苛立ちのままディートリヒに詰め寄る。彼は少し考えるそぶりをして、読んでいた本をベッドサイドのテーブルに置いた。そうしてベッドに腰を掛けたまま、身を乗り出して彼を睨みつけるわたしに耳元で囁く。

「俺の差し金ではない。ということは、キミにもわかるんじゃないのか」

考えうる可能性に思い当って、わたしは絶句する。父がディートリヒを婚約者として歓待した。そしてわたしたちを同室で休むように計らったのもいわずもがな父だ。命の恩人だからと手放しでディートリヒのことを信頼しているとは思っていたが、婚約しているとはいえまだ結婚していない男女を同じ部屋で過ごさせるのを許すのはいくらなんでも度を越している。

「お父様ったら、先走って……」

「俺にとつてはありがたいことだ」

ディートリヒは馴れ馴れしくわたしの肩を撫で、手を徐々に下へと滑らせていく。男の目を喜ばせる薄くなめらかな生地のカミソールの上から、胸の飾りを簡単に探り当てられる。

「ひうつ……」

乳輪の際を指で円を描くように愛撫されれば、何度も暴かれた身体がぞくぞくと粟

立っていくのがわかる。くりゆくりゆ♡と執拗に責め立てられて、あっという間に息が上がってしまう。

「毎度毎度勢いよく怒っているはずなのに、俺が肌に触れればすぐ女の顔をするな」

「あ……っ♡やつ、ち、ちがつ」

決定的な刺激は与えられずに、ひたすら乳輪をくすぐられる。はやく先っぽを触ってほしいと、すっかり硬くしこった胸の飾りがキャミソールを押し上げて主張している。

「……っ♡♡」

焦れてたまらなくて、わたしは胸を揺らしてしまう。それなのに、ディートリヒの指は触ってほしいところを通り過ぎてしまう。

「なんっ、なんでえっ……♡」

思わず甘く媚びる声が漏れて、わたしはあわてて唇を噛む。涙目になりながら、憎たらしい男を睨みつける。

「キミは俺のことが嫌いなんだろう。それなのに、家の主人の一存で憎たらしい男の部屋を、自分の意志に反して訪れている。そうだろう？」

「そ、そうよ」

「それなのに俺にこうやって触られて、そんなによがってみせて、はしたなく胸を突き出しているのか？」

「……っ！♡」

わたしは自分の痴態を指摘されて唇をかみしめる。必死に否定するように頭を振った。

「ちがつ、ちがう……っ♡」

「キミは嘘つきだ。こんなに反応させているのに」

キャミソール越しでもわかる、ツンッと突起した胸の飾りに爪を立てられる。たった一往復だけの刺激で、身体に甘いしびれが駆け抜けていったのがわかった。

「んお♡それっ♡やめてえ♡」

「まったく、淑女とは思えない感度だな。すまない、キミの身体をこんな風に変えたのは俺だったか」

白々しく笑うディートリヒが、わたしの神経をひどく逆撫でする。それなのに追い詰めるようにカリカリ♡と乳首を引っ掻かれて、カラダが追い詰められるように熱くなる

♡

「そう、よ、あなたは許されないことをしてるんだか、らあ♡♡」

布越しにぐりぐりと、両胸の飾りを容赦なく責め立てられる。指が固くしこった乳首に食い込む強い刺激にわたしは背をのけぞらせた。

「もうこんなに硬くして、期待しすぎじゃないのか」

布越しにもわかるほどに乳頭を大きくしたわたしに、ディートリヒは薄く笑う。その意地の悪い笑みにさえきゅん♡と子宮がうずいてしまうのだからどうしようもない。きつと淫紋なんて、刻まれたせいだ。

「んっ♡あ……っ♡」

「キミは摘ままれるのが好きだろう？　ちゃんとお気に入りのお触り方としてやろうな」
胸の飾りを指でつままれ、強弱をつけて颯られる。親指と人差し指でこすり合わせられるように抜かれてしまう。乳輪の根本から先っぽまで、尖ったそれを見せつけられるようにゆっくりと指でシコシコ♡と擦り上げられる♡あっという間に頭が真っ白になって、目の前の男に逆らう気をなくしていく自分がこわい♡

「ああんっ♡これ、よわいのしって♡ひいっ♡うっ♡♡さいてばっ、ひきょうものおっ♡」

「まだ減らず口を聞く余裕があるのか。まだ余裕みたいだな。だがいつまで持つかな？」
指の腹で押し込むように擦り上げられたり、弾かれる度に甘い痺れが広がっていく。ぴんぴんに硬くしこったそこはすっかり充血しきっていた。布地に擦れてひりひりするのにもっといじめられたいと先っぽが切なく疼いてたまらない♡

「っ♡も、やめてえ♡」

このままじゃ、またなし崩しにカラダを重ねてしまう♡わたしは身体を苛む愛撫から逃れたくて、身をよじる。けれどそんな抵抗すらディートリヒにはお見通しだった。

「いい加減あきらめろ。キミの身体は俺に触られただけで、すでに抱かれる準備をしているぞ」

ぎゅっと乳首をつまみあげられて、痛みと快感がない交ぜになる刺激にわたしはひたすら喘ぐことしかできない♡

「あゝっ♡♡♡」

まだ乳首しかかわいがられてないのに♡もうカラダが熱い♡また貫かれたくなる♡どうにかカラダの熱を冷まそうとゆっくりと息を吸う。でもどうしたって、ディートリヒの指に翻弄されてしまう。

必死に息を整えるわたしに、ディートリヒは口元をゆがめた。

「そろそろ何度も抱いてやったことをカラダが思い出したんじゃないのか？」

「……っ！」

「どうせミアは俺から逃れられないんだ。はやく認めたほうが得策だぞ」

「ふざけないで、誰があなたなんか……！」

わたしはまだ屈していない。触られたらチカチカと目障りに光る、ピンクの紋を刻まれたって、わたしは心までディートリヒのものになったつもりなんてない。必死に首を横に振って抵抗する。けれどそのたびに胸飾りをきつく摘ままれてしまえば、あさましく強請る言葉を口にしてしまいそうだ。散々可愛がられて、ここを刺激されると気持ちよくしてもらえるのカラダが覚えちゃってる♡ベルを鳴らすたびに餌を貰って、鐘の音を聞くたびに涎を垂らすようになってしまった犬みたい♡

「あっ♡やだぁ……っ♡やだ、ちくびしこしこしないでえ……っ♡」

わたしは涙声で懇願するが、ディートリヒは聞く耳をもってくれない。ぷくつと愛さ

れやすい形に肥大した乳頭を押しつぶすように責め立てられる。

「ひぎいっ♡♡あっ♡うううっ♡♡あっ、ああん♡♡♡」

乳頭の窪みに指をねじ込むように押し込まれれば、ガクガクと腰が揺れてしまう。

ディートリヒは執拗にその愛撫を繰り返した。

「ひきょうものっ♡ひきょうものお♡」

何度も身体を重ねられて、わたしの好きどころ全部わかられてる。またカラダが屈する準備をはじめる♡また気持ちよくなることしか考えられなくなる♡布越しじゃ足りない。こんな邪魔な布早く取り払って、はしたなく膨らんだ乳首に、熱い舌をねじ込んでほしい♡♡おつきくなった乳輪を指で思い切り広げて、勃起して恥ずかしい乳首にお仕置きするように指でほじくり返すみたいにかわいがってほしい♡

「ふーっ♡ふう……っ♡♡♡」

わたしの頭の中はいやらしい妄想でいっぱいになっていた。これ以上嬲られたら、も

う我慢できない。

「でい、ディートリヒ……♡♡♡」

憎たらしい男の名前を呼ぶには、あまりにも甘ったるい媚びた声。ディートリヒは薄く笑って、わたしの胸の飾りをひととき強くつまんだ。

「ひっ♡ひいんっ……♡♡♡」

痛みと、それをほるかに上回る甘いしびれが乳首から全身に駆け巡って、目の前が真っ白になる。下着の中はもうぐちゃぐちゃに濡れていて、内腿まで愛液が垂れてきているのが分かる♡愛液トロトロな自分を自覚して、それすら気持ちよさの助けになってしま
う♡

「キミの身体はもうとくに屈服しているだろう。俺のものになりたがっている」

わたしの身体の変化を見透かすように彼は言った。わたしはぶんぶんと首を横に振る首を振ることで拒絶を示すのに、ディートリヒは執拗に乳頭を責め立てるのをやめてく

れない。

「ひいっ♡あゝっ♡あゝっ♡♡♡」

布地ごと乳首を押しつぶされて、わたしは激しく腰を揺らす♡全身の筋肉がものすごい速度で緊張と弛緩を繰り返していく♡頭で気持ちいいのが弾けて白んで、カラダだけが勝手に無様にガクガク♡と痙攣して絶頂したのをアピールする♡それなのに、ディートリヒは赤く腫れた乳首を弄る手を休めてくれない♡

「ちょ、まって♡まってえ♡」

ディートリヒはわたしがイっていることに気づいてるはずなのに、責め立てる手を緩めない。

「イってる♡♡イってるのに……っ♡♡♡ひぎいっ♡♡♡」

身体をのけぞらせて絶頂を迎えるわたしに、ディートリヒは追い打ちをかけるように胸の飾りをごしごしと指の腹で擦る。布越しに伝わる摩擦は、乳首イキの余韻に浸る暇

さえ与えずにわたしをさらに追い立てていく♡

「ばっ♡ひいっ♡♡やらっ♡や、やめてええっ♡♡♡」

布地とこすれる痛みも快感に変わってしまったて、わたしは腰をへこへここと情けなく揺らしてしまふ。そんなわたしを見て、ディートリヒは嘲笑っていた。

「すごい声だ、娼婦でもキミほどうやらしくはないだろうな」

屈辱的な言葉にわたしは涙をこぼした。同時に乳首を思い切り押しつぶされて身体がのけぞる。

「ひっ♡あゝっ♡♡♡」

ひくひくと震えるおマンコからぶしゃああ♡と潮が噴き出す。わずかな布しかない下着では、噴き出す飛沫を受けとめきれない♡べちゃべちゃになった下着から、滝のように潮が流れ落ちていく♡ベッドシート（に大きな染みを作るばかりか、どこから飛び散ったのか客間の床にも飛び散っている。太ももにもダラダラと垂れて、いやでも自分が乳

首だけで潮吹きイキしてしまったことを思い知らされる。

「あっ♡へえ……っ♡ひうっ♡」

乳首イキの余韻に身体をびくつかせていると、ディートリヒがまた胸に手を伸ばそうとしていた。わたしは慌ててその手を掴んで止める。

「ご、ごめんなさい……。もうゆるして……」

いやいやと首を振って懇願するわたしに、ディートリヒは意外そうな顔をした。

「キミのほうからお願ひしてきたんじゃないのか？」

「わたしがっ、なにをおねがいたっていうのよっ」

わたしが睨みつけると、ディートリヒは意地の悪い笑みを浮かべた。そしてわたしのキャミソールに指をひっかけるとそのままめくり上げた。わたしは慌てて胸を隠そうとするが、それよりも早く彼の顔が谷間へ埋められる。

「ひぐうっ♡♡あっ、あぁっ♡すっっちゃ……だめえ……。っ♡」

じゅううつと下品な音を立てて、彼が強く胸を吸う。屈辱を与えるためかわざと音を立ててねぶられる。熱くぬめった舌が、乳輪をくすぐり、その中心の窪みにねじ込まれる。

「あゝっ♡あっあっ、あっ♡♡」

ちゅっちゅと胸の先っぽを吸われるたびに子宮がうずく。舌先で何度何度も乳首を舌でほじほじされて、お腹は切なくうずき、おマンコでたたえきれなかった愛液が、太ももまでとろとろと垂れてしまっている。

「もうっ♡や、やめてっ♡♡またちくびでイっちゃ……うう……♡♡♡♡」

「またイキそうなのか？ キミはほんとうに敏感だな」

ディートリヒの責め立てにわたしの乳首はもうこれ以上ないほど勃起しきっていた。それでも容赦なく愛撫を続けられ、わたしは髪を振り乱して悶えることしかできない。

「ふあああゝっ♡♡あっ♡あゝっ♡♡♡♡」

もう何も考えられない。乳首を舌で舐めまわされるたびに絶頂して身体がびくびくと跳ねてしまう。

「あっ、ああっ♡イ、イクぅ……っ♡♡」

足の指がピンッと伸びて、わたしは背中をのけぞらせた。絶頂の余韻に浸る暇すらなくまたすぐに責め立てられる。ぷくっ♡と膨らんだ乳首を舌で執拗にはじかれて、またかんとんに絶頂へと押しあげられる。

「っっっ♡♡♡」

もう何度目の絶頂かわからなくなったところ、ディートリヒはようやく胸から顔を離す。もう抵抗する気力もすっかり失ったわたしをベッドへ押し倒した。散々なぶられた乳首は唾液でてらてらと濡れそぼっていて、赤く充血して大きく膨らんでいる。白い胸のなかで、そこだけが浮いているようにいやらしかった。

「や、やらあ……っ♡もう、おっぱいイジメないでえ……♡♡♡」

さんざん翳られた胸の飾りはひどく敏感になっていて、少し触られるだけでまた達してしまいそうだった。これ以上開発されたら狂ってしまう♡それなのにディートリヒはまだ許してはくれなかった。

「まだだ」

そう言うとは彼はわたしの胸の飾りをまたつまみ上げた。そしてそのままぎゅうと引く張るように圧迫される。痛みと快感が同時に襲ってきて目の前が真っ白になった。

「ひゃうううっ♡♡♡♡♡」

ぷしゅっ♡♡ぷしゅっ♡と栓が壊れようとおマンコが潮をまき散らしてしまう。自分のカラダなのに、意のままにならない淫らさに涙がこぼれてしまう。

「ひどいっ♡ひどいば♡どうしてこんなことするのお」

「こんな身体に調教したらもうキミは後戻りできないだろう？ 素直に受け入れろ。俺と結婚すればキミのこのいやらしい身体が毎日満足するまで可愛がってやる」

ディートリヒはそう言いながらわたしの両方の乳首を引っ張り上げた。

「あひいっ♡♡ひっばっちゃ、らめえ……♡♡♡」

わたしはみっともなく腰を揺らすことしかできない。ディートリヒの口元が楽しげに歪むのがわかった。そして彼の指がぴんっ♡と乳首を弾き上げる。じじっ♡と脳みそが焼き切れる

感覚が襲って、焦燥感がわたしを襲う。

まずい。こんなにされたらほんとうに戻れなくなる。

「くっくっ」

わたしはなんとか力を振り絞って起きあがり、よろよろとベッドから立ち上がった。

何度もイカされたせいでまともに足に力が入らない。いますぐその場にへたりこみたいカラダを叱咤して、ディートリヒをにらみつける。

「ふざけないで、もう、あなたとは結婚なんてしない。お父様をお願いして、婚約を解

消してもらうんだからっ」

そのままふらふらと扉へ歩み寄ろうとすると、腕を強い力で掴まれる。

「ひうつ！」

振りかえればディートリヒの刺すような視線がわたしに突き刺さる。狼に睨まれたりスのように身体がすくみあがった。ディートリヒはうつすらと笑いながら、耳元で聞き取れないほどの声量でなにか呟いた。

「な、なに？」

「わかった、一緒にご両親の部屋へ行こうか。ご両親がキミの訴えに耳を貸すとは思えないがな」

「な、なによ。どういうことよ」

彼の意図が読めず聞き返すと、薄い唇を緩やかに歪めた。

下着姿のままのわたしの手を引いて両親の寝室の前に立つ。

「ちよ、ちよつと、こんな格好のまま両親の部屋にいくなんて無理よ！」

泣きそうなたたしにかまわず、ディートリヒが扉を断りもなくがちやりと開ける。逃げようとするわたしの腕を引いて、ディートリヒに部屋の中へ押し込まれた。落ち着き払ってドアを締める男を信じられない気持ちで見つめている。

「どうした、ご両親に直談判するんだろう？」

わたしはディートリヒの手を跳ね除けて覚悟を決めて二人の前に立つ。こんな格好見られたくはないが、ただ事ではないとわかってくれるだろう。

「お父様、お母様、助けて！ わたし、こんな人と結婚なんてしたくない」

わたしは涙目になりながらディートリヒを指さした。しかし両親はわたしの必死の訴えに耳を貸す様子はない。それどころかこちらを一瞥すらしなかった。

「な、に……どうということ」

仲睦まじく談笑する両親は、わたしの存在に気づかないようだった。異様な雰囲気

わたしは後ずさる。

「ようやく気付いたのか。キミと俺には透明化の魔法をかけている。ご両親には俺達の姿は見えていない」

「透明化……そんな……っ！」

わたしは振りかえってディートリヒを思いきり睨み付ける。ディートリヒは、わたしの訴えをもみ消すつもりなのだ。

「ご両親の前で仲睦まじくすればキミの考えも変わるだろう」

そう言ってディートリヒはわたしの腕を乱暴に掴む。これから自分の身に起こることを察して、血の気が引く。

「い、いや……っ」

ディートリヒはわたしを両親が腰掛ける天蓋付きの寝台の前へ連れていこうとする。

わたしは必死になって抵抗するが、男の力に抵抗できるはずもなかった。

「離してっ！ いやあ……っ」

わたしがいくら叫んでもディートリヒは意に介さない。両親の目の前で、キャミソールをたくし上げられて、胸をさらけ出してしまう。

「い、いやっ」

「俺にかわいがられて乳首をぷっくりと腫らしたこのいやらしい胸をご両親に見てもらえ」

ディートリヒは背後からわたしの胸を寄せながら持ち上げて、両胸の飾りを指先で押しつぶした。

「ひっ♡」

突然の刺激に身体がのけぞる。けれど両親はわたしに気づく様子はなかった。

透明化しているのだから当然なのだが、それでも両親の目の前でいやらしい事をされるのは耐え難い。身をよじるが、何度もイカされたからかまともに力が入らなかった。

「いやあ……っ」

ディートリヒは両方の胸の飾りを指で挟みこみ、ぐりぐりと容赦なくこねくり回した。さんざんいたぶられ充血しきった乳首は固く立ち上がって、少し触れられただけでも電流が走るような快感が襲う。

「んっ♡あっ♡やめ……てっ」

わたしは必死に首を横に振るがディートリヒが責め立てる手を止めることはない。

「ああ、すまない。キミが一番好きなのはここだったな」

ショーツの前をつうつと撫でられただけで、腰が砕けそうになる。

「ひあっ♡そ、そんなわけ……ないじゃない」

そう強がってみせるも、ディートリヒは喉の奥で低く笑うだけだった。ディートリヒは下着の上から肉芽を探り当てると、親指の腹でぐりぐりと押しつぶした。

「ひっ♡やあっ♡♡あっ、ああっ♡」

強い快感から逃れようと腰を揺らす、ディートリヒはそれを許さないとばかりにわたしの腰をしつかりと掴んで身じろぎすらできなくする。いいところをずっと刺激されて、お腹につけられた所有の印がピカピカと光る。

「女の子の弱点ばかり、クリばっかりゆこりゆして、ひきょうものっ♡」

布越しにも分かるほど勃起あがった肉芽をかりかりと爪先で引っかけて、わたしは内股を震わせた。

「ああ、キミのクリトリスがこんなにも大きく肥大化してこうやって弾きやすくなっているのも全部俺のせいだな。好きなだけ俺を口汚くののればいい」

ディートリヒは愉しげに口元を歪めると、布越しに肉芽を爪先でぴんぴんっと何度もはじく。下品に勃起したクリトリスはその刺激に大げさに悦んで、どんどん固くなってしまう。

そのたびに甘い快感が腰に溜まっていくようで、わたしは情けない喘ぎ声をあげるこ

としかできない。

「あゝっっ♡♡♡らめえっ♡クリばっかいじらないで……っ♡そこ♡ほんとにダメなのっ♡」

彼はわたしの懇願など聞こえていないかのように執拗に肉芽を責め立てる。その度、わたしの意思とは関係なく身体が跳ねる。力を入れようと足を開いて、およそ淑女がしないであろう下品なガニ股になってしまう。膝を笑わせながら立っているだけで精いっぱいだった。

右から左から下から上へと絶え間なく肉芽をはじかれる。ピン♡ピン♡と尖っている肉芽を愉しそうに弾かれて、からかわれている♡どうせまた快楽に流されるんだろうって、バカにされてるっ♡

「お♡お♡クリ、ピンピンしちゃだめえ……っ」

気持ちよくなるためだけにピンピンに勃起したクリは、もう限界だってくらい張り詰

めている。がくがくと震える身体。泣きそうに顔をゆがめるわたしに、ディートリヒは毒々しいほど甘い声で囁いた。

「もう限界だろう？ イっていいぞ♡ほら、キミの情けなくてかわいいイキ顔をご両親の前で晒してしまおう」

その声と同時に、ぐりいつと強く肉芽を押しつぶした。わたしの頭の中が真っ白に染まる。視界がチカチカして、背中が大きくのけぞった。しかし絶頂の余韻に浸る間もなく、追い討ちをかけるように肉を指ですりつぶすように弄んだ。

「あゝゝっ♡♡イってりゅっ、いまイってるのに♡♡♡♡」

絶頂直後の敏感すぎる身体には強すぎる快感が、せり上がってくる。ムクムクと勃起した秘豆からしょわっと熱い液体がせり上がってくるのを感じた。

「あっ♡あゝゝっ♡♡でるっ、でちゃうう……っ♡♡♡おとうさまとおかあさまのまえでお潮ふいちゃ、やだやだやだヤダヤダあっ」

激しい絶頂感と尿道を駆け上る快楽に、泣き叫ぶ。いくら見えないとはいえ、尊敬する二人の寝室を汚すような真似をするなんて許されるはずもない。

「あゝっ♡♡おねがいっ、なんでもいうときく、きくから、クリトリスおしつぶさないでえっ♡♡」

潮吹きする一歩手前、ディートリヒがおもむろに床に膝をついた。絶頂寸前のカラダでぼうっとしながら訳も分からず彼を見ていると、ぐいとショーツを横にずらされる。そして、露わになった秘豆をぱくつと咥えた。熱く湿った口腔にすっぽりとクリトリスをおさめられて、ざらついた舌が、敏感な肉芽を舐め上げはじめた。

「ひっ♡ひあああっ♡♡やめ、やめえ……っ♡♡でりゅ、でるうう♡♡♡」

ディートリヒはわたしの言葉を見無視し、秘豆に吸い付いたまま舌を動かした。舌先で小刻みに刺激され、唇ではみはみと甘噛みされて、びくっ♡とカラダの筋肉が強張る。ガクガク♡と膝を震わせながら踏ん張っても耐えられずにわたしは呆気なく達してし

まった。プシャアッーつと勢いよく透明な液体が噴き出ていく♡
「ひぐっ♡♡あゝゝっ♡♡♡やらあっ、お潮、とまんにゃっ♡」

はしらないと思ひながらも、宮廷を足早に駆けめぐり、目当ての人物の姿を探す。精悍な横顔を見つけて、わたしは弾む息を整えながら声をかけた。

「イグナーツ、イグナーツ？ 久しぶり。すっかり間違えてたくましくなったわね」

辺境伯のイグナーツはわたしの幼なじみで、幼い頃はよくいっしょに遊んだ仲だ。家督を継ぐために、しばらく辺境に赴任し国境の警戒にあたっていた。

「ミア、久しぶり。きいたよ、婚約したんだってな」

「……ええ、もう知っているのね」

イグナーツの笑顔がこころなしかぎこちない。言葉にしたことはないが、わたしは結婚するならその相手はイグナーツだと思っていた。父親同士仲がよく、よく軽口で将来はお互いの子どもを結婚させようと笑っていたからだ。そしてイグナーツもわたしも、まんざらではなかったのだ。

「天才の誉れ高い魔術師で、医者がさじを投げて病状に臥せていたお父様を治したん

だろう。すごいじゃないか、そんな人の妻になるならきつと幸せになれるよ」

まるで自らにいい聞かせているように饒舌なイグナーツに、わたしはきゆうっと胸を締め付けられる思いだった。恋人のように、日によく焼けた頬を触ってどうすごしていたか聞いてみたい。長年大切にしていたほのかな恋心を打ち明けてしまいたい。

「イグナーツ、そのっ……」

言葉を紡ごうとした瞬間、お腹あたりがじくりとうずく。刻まれた淫紋が、わたしを咎めているのかもしれない。

「——っ」

おもわず顔をしかめれば、イグナーツがなにかあったのかと心配そうに顔をのぞき込んできた。

「どうしたミア、大丈夫か？」

イグナーツが腰に手を回そうとした瞬間、低い声が響く。

「ありがたいが、それにはおよばない。辺境伯」

「デイ、ディートリヒ、あなた、どうしてここに」

姿を見せた婚約者は眉間に深い皺を刻んで、不機嫌を隠そうともしていない。

「お初にお目にかかる。わたしの婚約者が世話になったようだな」

まるで牽制するように、わたしの腰を撫でさすり、ぴったりと身体を寄せてくる。

「ちよつと、あまり人前でこんなことはっ……！」

抗議した瞬間、きゆうっ♡とお腹がうずく。刻まれた淫紋の作用がじわじわと全身を蝕み、まともに立っていられない。イグナーツにはこんな姿見られたくないのに、頬を上気させて、しなだれかかってしまう。

「おや、本当に気分がすぐれないようだな。ではこれで失礼する。行こう」

腰に手を回され、ぴったりと密着するようにしなだれかかりながらわたしは朦朧とする意識のまま彼について行くしかなかった。

連れられた先は、宮廷の奥にあるディートリヒの私室だった。研究室も兼ねているここをおとずれると、毎度むせかえるような葉草のにおいが鼻孔をくすぐる。この部屋の匂いを嗅ぐだけで、下肢がきゅうっ♡とうずいてしまう。ディートリヒがドアを後ろ手に閉めたつぎの瞬間、抱きかかえられてベッドに身体を沈められる。

「きゃっ！」

「噂には知っていたが、あれがキミの幼なじみか。ずいぶん仲がよさそうだな」

ディートリヒは瞳を揺らしながら、かすれた声を絞り出す。わき上がる感情を必死に抑えているようだった。けれどもわたしはディートリヒの心中を察しながらも鼻を鳴らすように笑う。

「……そうね、あなたよりよほど仲良しよ。誰かさんとは違って紳士的だもの」

家族水入らずのはずだった避暑地への旅行に、ディートリヒが顔を出してからはいよ

いよこの婚約も翻せないとこまできてしまった。父母も、まだ幼い弟妹たちでさえディートリヒが家族になるのを望んでいる。わたし一人がいまだ彼のことを受け入れられない。

「ミア」

「いいのよ、あなたはわたしの夫になるんだもの。ここでなにをしようと、咎める人なんていないわ」

投げやりにそう告げて顔をそらし身体をベッドに預ける。うなじに長い指が触れて、びくりと身体が震えた。刻まれた所有紋のせいで、身体がひどくうずいてしまう。

「っ……♡」

「わかった、キミがその気なら俺もそうさせてもらう。そんな反抗的な顔をして、また俺のものをここに挿れてくれと泣いて媚びるんだろう？」

へこんだ腹に手を置かれる。ぐいっと軽く押されると、淫紋から伝わる刺激が子宮に

波のように伝わって、ぞわぞわと身体が熱くなっていく。

「はっ……♡」

大嫌いな男に今から抱かれるのに、もう身体が準備し始めているのがわかる。わたしが湿っぽい息を吐いたのに気がついたのか、ディートリヒは口元に弧を描いた。

「本当にキミは、口ほどにもない。そんなに瞳をとろけさせなくてもたっぷり愛してるから安心しろ」

「だ、だれがあなたなんかに、うむっ♡んっ♡んちゅっ♡」

唇にやわらかいものが触れて、何度もついばむようにキスされる。ただそれだけの、こどものようなキスなのに、だんだんと受け容れるように唇が開いていく。ちょんっ♡と尖らせた舌が隙間に差し込まれると、まるで待ち望んでいたかのようにディートリヒの背中に腕を回してしまう。熱い舌が差し込まれて、口腔の敏感な粘膜をくすぐっていく。骨張った手がドレスのフックを外し始めたことに気づきながら、わたしは夢中でき

らいなはずの男の舌を吸っていた。

「んちゅっ♡はっ♡」

ぞわぞわと背中が粟立って悦んでいる身体に目眩がしながら、わたしはこの男を拒めない。

「まるで想い合っている男女みたいだな。俺に縋ってキスをねだっているのか、ミア」
口元をほころばせながら胸の膨らみを寄せるように揉みしだかれる。

「っ、ふざけないで」

思い出したようににらみ返すが、ディートリヒは口元を歪める。口ではきらいだと悪態をつきながら、すぐに甘くうずいてしまう身体をあざ笑っているのだろう。

「なにがたのしいのよ」

「いや、キミの身体は正直だと思ったただけだ」

胸元のドレスをずり下ろされれば、淑女とはいいがたい肥大化した乳輪が姿を現す。

胸と乳輪の境目を指でくるとなぞられて、変わってしまった身体を自覚しろとなじられているような錯覚に陥る。乳輪の縁をなぞられながら、おっぱいに指を食い込まされる。

「キミの身体はどこもやわらかいな。口ではイヤだといいながらも俺を包んでいやらしく反応する」

「う、うるさい。侮辱するなら帰るわよ」

胸を揉みしだかれると、それだけで軽く息が上がってしまう。抵抗してもいつだって同じ結果になるのだから、有無をいわず抱けばいいのにといい諦めにも似た考えが過るが、認めてしまうのはこわい。

「ほう、帰れるのか。こんな身体で？」

ディートリヒは尖り始めた胸の飾りにぐいと指を押し込む。突然の強い刺激に、喉を晒して身体が震えた。

「んひっ♡」

「このいやらしいカラダを自分で慰められるのか？」

勃起した乳首を詰問するように、指先でピンピンっ♡と弾かれる。悔しいのにそのたびにビクビクっ♡と腰が勝手に震えてもっと触ってほしいっ♡てまた乳首が大きくなってしまう。

「それとも、帰ってから自分で慰めるか？」

「ばっ、ばかにしないで、だれがそんなことっ、お♡」

固くなっている乳首を、まるで糸をこよるようにひねられる。ぞわぞわっと背筋に甘いしびれがはしって、胸を突き出して媚びるように左右に振ってしまう。

「乳首くりくりひねられるの気持ちいいんだろう、ミア。そうだ、キミは俺にそうやって甘ったるい顔をさらしていればいいんだ」

低くかすれた、甘い声で囁かれる。拓かれたカラダが強張って固まった。それを自分

を受け入れたと勘違いしたのか、ディートリヒが口元を綻ばせた。

「そうだ、いい子だな」

ご褒美とばかりに乳首の先端を思いきり爪でカリカリ♡されて、ビクンっ♡と腰が跳ね上がる。おまんこがひくひくして、お腹の奥がうずいていく。まだ胸しか触られていないのに、子宮が下がり始めちゃってるのがわかる♡

「はっ♡お♡あゝ♡♡」

もう腰がヘコヘコ勝手に前後に動いておねだりをする。何度も何度も気持ちいいの教え込まれて、どんどん堪え性のない身体になっちゃってる♡

「どうした、下も触ってほしいのか？」

調教された身体は、自分で慰めるより目の前の大嫌いな男に触って貰った方が遙かに気持ちいいと知っている。愛液をたっぷりたたえた肉ビラをなぞられて、クチクチと水音を立てた。

「っっ♡」

もうじき触ってもらえると期待しているクリトリスがムクムクと勃起して、ぴよこんと頭をもたげているのに、わざとそこを避けて、蜜穴の周りを指でくすぐるように撫でる。肉芽の根元に指が近づいて、思わず期待に腰を揺らせば、意地悪く笑いながら指を引いていく。

「なん、でっ、はやく触りなさいよっ……」

憎らしい男を睨み付けると、心底愉快そうに口元を歪めている。わたしをいじめるのが楽しくて仕方がない、といった表情がうらめしい。

「触ってほしいときはどうするか教えただろう、ミア」

おねだりするときは自分で恥部を広げて、ひくつく雌穴を見せつけて、屈辱的なポーズで懇願する。そう教え込まれた身体が自然と媚びそうになるけれど、わたしはなんとか耐えた。

「っ、わたしの身体を暴いて、自分のものにしたつもりでいい気分なんでしょう。あな
たって、寂しいひとね」

あざ笑うように反発すると、ディートリヒの瞳が色褪せすつと冷たく細められる。ひ
どく冷たい瞳の色に、まずい、と後悔するけどもう遅い。彼はわたしの淫紋に手を当て、
呪文を唱えた。

「や、やめっ♡あ♡あお〜♡」

魔力で刻まれた紋が光って、子宮に甘い痺れが駆け抜ける。お腹の奥が切なくて、耐
えがたくて頭がおかしくなりそうだった。

「な、にを、したの……♡」

「そうだ、ミアのいう通り俺は空虚な人間だ。だが、こんなさもない俺でもキミを手に入
れることができる。ミアの心がどこにあるかなんて、大した問題じゃない。それを今
から教えてやろう」

忌々しくピンクに輝く紋を指先でなぞられただけで、狂おしい熱が全身をむしばんでいく。切なさを訴えるようにおマンコが物欲しげに口をパクパクと開閉させて、だらだらと愛液を垂れ流す。ぴんつとクリトリスが勃起して、触ってほしいと訴えている。窮屈そうに包皮を押しあげている肉芽がうらめしい。ディートリヒは微笑みながらドロドロのメス汁を指で掬う。

「ひう♡」

「は♡こんなに簡単に粘ついた本気のメス汁を垂れ流す身体で、俺から逃げられるわけがないだろう」

くちっ♡くちっ♡と愛液を絡ませた指で、根元から先端までゆっくりとクリトリスをなぞられる。それだけで頭の中にパチパチと電流が走る。

「あ♡はっ♡んお♡」

「はは、包茎クリを少し撫でてやっただけでもイッたのか？」

馬鹿にするように笑うディートリヒの顔を睨みつける。ありったけの侮蔑と軽蔑を込めているつもりなのに、クリトリスをよしよしされると勝手に顔が蕩けてしまうっ♡

「おっ♡ほっ♡あ♡あお♡」

「まったく怒りながらこんな簡単に気を遣って。俺には屈しないんだろう？　こんなに簡単にイってどうするんだ」

喉奥で笑いながら張り詰めた包皮をゆっくりと指でずらして、先端を剥かれてしまう。空気に触れた刺激だけでも気持ちがよくて、息があがってしまう。膨れ上がったクリトリスの先端から、だらだらと犬の涎みたいに愛液が流れる。

「俺のことが嫌いでも、ミアはここが大好きだろう？　俺の舌でこのいやらしいクリトリスを押しつぶされて何度も絶頂を味わえ」

「い、いやっ、やめっ♡あお♡」

れろおっ♡と舌先を肉芽に押し付けられる。硬い芯を持った肉芽を、柔らかい舌で

ぎゅっ♡ぎゅっ♡と抑えつける。むき出しのクリをあたたかい舌にすっぽり包んで、ゆっくりと左右に動かされる。

「ばっ♡ぶっ♡、らめっ、それっ♡らめえっ♡」

勃起して固くなったクリトリスを舌でぐりぐりと潰されながら、亀頭を刺激される。敏感なところを舌の腹でろろ♡ぞりぞり♡舐められて、腰が勝手に浮き上がる。

「ぶっ、い、いやっ♡そ、そこばっかりっ、い、いやあ♡」

勝手に腰がへこついて、舌に擦り付けてしまう。こうされるともっと気持ちよくなれること知ってしまったているから、おねだりするのがとまらない♡

「お♡あぶ♡♡こんな、おとこにいつ♡クンニされて♡ちがうのにいつ♡腰、とまんないっ♡」

堪え性がなくなってしまった身体を恨めしく思いながら、卑猥な腰振りダンスがとまらないっ♡クリ亀頭にぴとっ♡と舌を当てられて、ほじくるように尖った舌をねじ込

むように円を描かれる。ズル剥けクリ亀頭を、舌でほじられて腰がガクガク震え始める。

「あゝ♡あっ♡あえっ♡」

「ミア、腰がへこへこと動いているぞ。そんなに俺の舌で舐められるのが気持ちいいのか？　ここ、弱いものな」

「ちがつ、ちがうのおっ♡お♡ほおっ♡♡」

いやいや、と首を振つても、身体が勝手に腰をへこつかせる。突き出したクリを舌先で舐めまわされて、尿意に似た感覚がぞくぞくとせりあがってくる。

「あっ♡ばぐっ♡ばぐからっ♡はっ♡あゝ♡♡」

クリトリスの先端から透明な液体がまき散らされる。腰を抑えつけられて、快感を逃がせない♡

「にゃん、でっ♡やだ、くちっ、はなしてっ」

勢いよく潮を吹き出すクリトリスをびったり口腔で包まれて、じゅるるっ♡吸い上げ

られる。屈服の証みたいに吹き出す潮を止めたくても、あたたかい口のナカに包まれて
いるせいで全然とまらない。イキ潮全部吹き出すまで容赦しないというように充血し
きった豆をバキュームされてなぶられてるっ♡

ぷしっ♡ぷしゅっ♡ぷしゅあっ♡

断続的に何度も潮を噴かされて、頭が沸騰したみたいにぼうつとする。ようやく口を
離されたところには、太ももに力が入らなくなっていた。

「あっ♡はあっ♡はっ♡」

息も絶え絶えで身体に力が入らない。必死に呼吸を整えているわたしを、ディートリ
ヒが見下ろしてくる。整った顔が近づいてきて、思わず顔を反らしてしまった。

「……いやに今日は粘るな。やはりあいつのせいかな。あの男がキミの前に永遠に現れな
ければあきらめがつくか？」

なにを勘ぐったのかディートリヒは乱暴に吐き捨ててわたしの顎を乱暴につかんだ。

そのままかみつくように唇を塞がれる。

「んっ♡ふうっ♡」

唇を割り開かれて、長い舌が入り込んでくる。縮こまっている舌を無理やりからめとられて、深い口づけをされる。口腔をなぶられながら、空いた手が薄いお腹をなぞって下肢へ伸びていく。無理やり唾液を流し込まれて、飲み込まれながら、指先がいろんな体液で張り付いた茂みをかき分けていく。長い指がゆっくりと肉芽を、円を描くように撫でる。

「ん♡ん♡~~~~♡♡」

すっかり充血しきった陰核を、愛液をまぶすように撫でまわされて勝手に太ももの内側がフルフルと震え始める。キスされながらクリいじめられてイクなんて、まるで恋人同士じゃないと頭によぎって、わたしはイカないようにぎゅうっとシーツを指先が白くなるほど握りしめる。

「……ふん、強情な」

必死に絶頂を耐えるわたしが気に食わないのか、ゆっくりクリを押しつぶしていた指が、ぎゅっと秘豆をつまんだ。上下に乱暴に抜かれて、痺れるような刺激が背中を駆け上がっていく。

舌をぢゅうっ♡と吸われて、シーツを握る力が思わず緩む。その瞬間に、肉芽を左右から二本の指でぎゅうっとなまされて、喉をのぞけらせて上り詰めてしまった♡

「お♡ほっ♡おお♡」

ぷしっ♡とぷしっとなげくおもらしするように先ほどよりも勢いを失った水滴がちよろちよると流れ出る。潮吹きアクメに身体を震わせているわたしを見下ろして、デイトリヒは鼻をならした。

「すっかりクリイキの癖がついたみたいだな。こんなに膨れ上がって勃起して、いずれ下着に擦れただけで感じるようになるんじゃないか」

「っ、バカなこといわないで」

涙で視界をにじませながら睨みつけければ、一枚の布をわたしに見せつけてくる。そして懷から小瓶を取り出して、粘度のあるピンク色の液体にひたひたに浸していく。粘液を含んだ重たい布がピタリと恥部に張り付く。

「な、なにそれ、や、やだ」

「布が擦れただけではイカないというなら試してやる。なに、ローションを含んだガーゼでクリトリスをマッサージされるだけだ。貞淑なミアなら気を遣ったりしないだろう?」

荒い縫い目がクリトリスに引っかかりながら、左右へゆっくり動く。ぬちっ♡くちっ♡といやらしい音を立てて、気持ちよくなるための神経が集中している肉豆を磨かれて、濁った間拔けな喘ぎ声が勝手に出てしまう。

「お♡しよれ、らめっ♡あぁ~~~~♡」

無遠慮にごしゅごしゅと磨き上げられて、イキ癖のついたクリトリスはあつという間に白旗を上げそうになってしまふ。齒を食いしばって、なんとか耐えようとしているわたしをあざ笑うかのようにささやいてくる。

「キミの身体をいやらしく開発したのは俺だ。式も来月に差し迫っている。キミとあの男の間に何があったかは知らないが、いまのキミはすでに俺のものだ。わかるか？」

重たい布をパンつと皺を伸ばすように張って、肉芽の亀頭に擦り付ける。追い詰めるように布が往復する速度がだんだん早くなって、また気持ちいいのがせりあがってくる。

「まけるっ♡まけたくないのにっ♡またお潮ふいていくっ♡おっ♡ほっ♡あゝゝ♡♡」

悔しいのにこらえきれずにぷしっ♡ぷしっ♡と断続的に透明な液体を吹き出せば、頭が真っ白になる♡いやらしい姿を冷めた目で見下ろされて悔しいのに、身体が勝手に悦んじゃってる♡

式場の扉が開いた瞬間、楽隊の音楽が流れ始める。誇らしげな父に腕をからめながら、赤い絨毯の上を一步一步ゆっくりと、共に進む。招待客のなかに、幼なじみの顔が見えた。記憶とたがわぬ穏やかな笑みを浮かべたその人に見られたくなくて、わたしは思わず目をそらす。一生この道のりが終わらないように願ったのにむなしくわたしは新郎の元にたどり着いてしまった。

「ああ、すばらしく綺麗だ」

うつとりと目を細めるディートリヒを睨み付けるが、誰もわたしの気持ちなんて問題にしない。ディートリヒはうつすらと微笑み神父へ向き直る。すべてを諦めた心地になりながら神父が読み上げる誓いの言葉を受け入れた。

ブーケを投げれば、わたしが幸せな結婚をしたと信じて疑わない友人達があやかろうと花束を囲む。おしゃべりな友人の手に渡れば、招待客がみな拍手して祝福した。

「ああ、やっとこれでキミは俺のものだな」

声を潜めて囁いてきたディートリヒはわたしの心までも自分のものにしたと疑わなかったように傲慢に笑った。

滞りなく式を終えて、幼い弟妹達をかたく抱きしめてから馬車に乗る。だんだん遠ざかっていく家族の姿を見て、わたしはひそかに涙を流した。

ディートリヒが用意したわたしの部屋に案内されるなかで、屋敷のなかが想ったよりも質素なことに驚く。王族の覚えがめでたい魔術師として、高額な俸禄を貰っているだろうに、ほとんどを魔術の本や貴重な薬草につぎ込んでいるんだろう。

ディートリヒが開けた扉の向こうに、白を基調とした上品な空間が覗いた。どこか実家のわたしの部屋に雰囲気似ている。

「ここがわたしの部屋？」

「ああ、出来る限りご実家のキミの部屋に似せてみた」

「そう、それくらいしかわたしを喜ばせることを思いつかないのかしら」

自分のセリフが思ったよりも嫌味たらしいことに驚いてしまう。身の回りの世話をす
るために側に控えていたメイドまで、目を見開いていた。

「……着替えるから出て行ってくれる？」

ディートリヒにそう告げて部屋をあとにさせると、メイドが「奥様」とわたしを呼ぶ。
少し触れる手が震えているような気がして、わたしはふうとため息をついた。

婚礼のドレスを脱がされてから、メイドが純白の下着をわたしに着せようと手を伸ば
してきた。品のよい光沢があつて肌触りもいいが、生地が薄いそれは胸のラインも先端
の突起の色も隠せるとは思えなかった。おまけにショーツは股の部分が二股に裂けてい
て、下着の体をなしていない。夜を愉しむためだけにつくられたとわかる代物に、わた
しは大きく眉をしかめる。

「っ、こんなの、はずかしくて着れないわ」

「でも旦那様は奥様にこれを着ていただくようにと」

ディートリヒに仕えているメイドたちはわたしが嫌がると困り果てたようで、ひっそりと部屋を出ていく。しばらくして主人と共に戻ってきたものだから、遠慮なく夫を睨みつけた。

わたしの怒りに戸惑うこともないディートリヒは使用人たちを退出させてからわたしにむかってため息をついた。

「ミア、あまり使用人を困らせるのは感心しないな。キミは優しい女性だと思っていたんだが」

「こんな煽情的な衣装を着ろなんていわれたら感情的にもなるわ」

「だが名実ともに俺の妻になったんだ。初夜くらいいいだろう？」

結婚式でつけていたコルセット姿のままのわたしの腰に、ディートリヒが手を伸ばす。それを叩いて払いのけた。眉を寄せて、わずかに瞳を揺らがせたディートリヒが低い声

で「なぜ」と呟く。

「いまさら身体をつなげることを拒んでも仕方ないだろう。それに、キミは俺の妻になったじゃないか」

その天才的な魔術と薬学の才能で、病床に伏せた父を回復させたディートリヒ。その対価に身体を要求されたから自分の純潔を差し出して、そこで関係は終わるものだと思っていた。それなのになぜか彼はわたしに求婚して、両親や幼い弟妹までもが彼を気に入る、結婚までしてしまった。

わたしだけが彼を嫌い、新しく家族になったという事実を認められないでいる。それがひどく歯がゆくて、いつもより余計に苛立ってしまう。

「っ、なんど身体を重ねたって、関係ない。わたしはあなたに触れられたくないの。こんなものを刻まれて、気持ちいいって思わされてるだけなんだから。あなたに触れられるなら、異形の魔物にでも身体を暴かれたほうがましだわ」

腹に刻まれて淫靡に輝く紋章に手を当てながら、ディートリヒを睨みつければ、彼は低い声でつぶやいた。

「……ひどいな、さすがに俺もそこまで言われたら傷ついてしまう」

一瞬見せた本当に寂しそうな顔がまだ幼い弟と重なって胸の奥がずくと重くなる。けれども謝ることもせずに目を反らせば、背筋をぞわぞわとさせるような声が響いてきた。

「化物に襲われる方がましというなら、キミが楽しむところを俺に見せてもらおうか？」
どういうことと問い詰めるまえに、足元の床に幾何学的な魔法陣が浮かび上がる。ぬるりとしたものが足に絡みつくような感覚がしてあわてて正体を探れば、無数の突起がついたドス黒い紫色をしたツルのようなものがわたしの足に絡みついていた。粘り気のある液をわたしの足に塗り付けながら這いずり回ってくる。タコのように見えるが頭部はなく、得体がしれない。放射状に広がっている触手が、わたしの四肢をとらえた。

「——なっ！」

抵抗するけれど、身動きが取れない。叫び出したい気持ちを抑えながらディートリヒを睨みつければ、彼はこうなったことが本意であるかのようにため息を吐く。

「なんでっ、こんなひどいことをするのっ……！」

「俺を受け入れるより、触手と愉しむほうがいいんだろう？ さあ、キミのいやらしく美しいところを見せてもらおうか」

おもむろに椅子に腰かけた男は、わたしをじいに見据えてくる。売り言葉に買い言葉で、迂闊な言葉を放ったことを後悔していると、ディートリヒが聞き捨てならないことを囁いた。

「キミは愛してもいない男に抱かれて何度も絶頂する淫乱だから、きっと彼らに遊んでもらうのも愉しいだろう」

「っ、ふざけないで！ こんなおぞましいものに触られて、気持ちよくなるわけないで

しょつ。こんな気持ち悪いモノ、さっさとひっこめてよ！」

ディートリヒの魔法で召喚された触手は、術者の命令に忠実に従うはずだ。ディートリヒがいいというまでわたしを犯し続けるに違いない。まわりつく粘り気のある液体が気持ち悪い。

「キミにとっては俺に抱かれるのもこの触手に抱かれるのも同じなんだろう？ それとも、まだ俺とまぐわうほうがいいか？ いまミアが俺に謝ってくれるならば初夜にふさわしい振舞いでやさしくキミを抱いてやるんだがな」

淡々とそう語るディートリヒに縋ることなんでもちろんではずもなく、わたしはかたくなに首を横に振った。

「そうか、残念だ」

ディートリヒが肩を落としたのと同時に、触手が思い思いに動きはじめる。無理やり足を開かされて太ももの間に滑り込み、一番大切な場所をすりすりとは撫でまわし始めた。

「っ、きもちわる……っ♡」

粘液がじわじわと布地に吸い込まれていき、秘裂を覆っている場所がしつとりと湿っていく。あっという間に下着としての役割をなくされた、ただの張り付いた布にされてしまう。ひたひたの繊維がおマンコに張り付く感触に、ひくっ♡と粘膜がわななく。少し兆し始めた肉芽に信じられない気持ちになりながら、唇を噛みしめた。

「っ、へんたい……！ やっぱりわたしを愛してるなんて嘘。こうやって魔物に犯されてる女を見て、自分の嗜虐心を満たしたいんでしょっ。本当に気持ち悪いおとこ……！」

きもちわるい、きもちわるいと繰り返せば、ディートリヒの臉がビクリと動く。

「……はは、俺はキミを傷つけてばかりだな。キミが俺を嫌うのも無理はない。だが、キミは俺と結婚したんだ。俺のやり方に付き合ってもらおうぞ？」

ディートリヒが触手に目配せすると、腕を拘束していた触手がぬるりと鎖骨を撫でる。そのまま、コルセットに覆われた膨らみの部分をずりずりと這いずり回る。胸の突起の

部分に突起を擦り付けるように繰り返して往復されて、思わず息が上がってしまう。

「ふっ♡、それっ♡やめてっ♡」

あまい上ずった声が出る。本当はこんな声、出したくないのに。目の前の憎らしい男に何度も穿たれて快楽を覚えてしまったカラダは、素直に気持ちよさを拾い始める。レース生地の下で、ぷくつと乳首が頭をもたげはじめる。思わず生唾を飲み込めば、びっしりと生えたイボイボがぐりぐりと乳首を押しつぶし始める。無数の突起に乳首を虐められる感覚に、ぞくぞくと背中が粟立つ。

「っ♡ほんとうにっ♡あくしゅみっ♡」

ピクピクとおマンコが震えて、とろりと粘度の高い愛液が垂れていく。ますますしつとりと濡れていくショーツを触手がぐい♡と食い込ませる。期待して膨らんだ肉土手とぷっくりと膨らんだクリトリスの形が強調されて目を反らしたくなる。先端を収縮させながらゆっくりと触手が肉豆に覆いかぶさって、突起を押し当ててくる。そのまま無数

のイボイボが左右にクリトリスを磨くようにゴシゴシと動く。濡れた布がぴったりと張り付いているせいで、摩擦が逃げていかない。気持ちいいのが全部肉芽に響いて、歯を食いしばりながら目を剥いた。

「~~~~っ♡ふうっ♡んぐ~~~~♡」

何度も吸われていじめられて、大きくなった腫れあがった肉芽を触手ブラシでこすられたら脊髄からあつという間に脳みそに気持ちいいのが駆け上がってきてしまう♡クリトリスをいじめられるだけでも頭がおかしくなりそうなのに、無数の突起で乳首も同時に刺激されたら、あつという間に太ももがブルブルと震えてしまう。あつという間に感じてしまつて、声を出すのを抑えきれなくなる♡

「ふっ♡んなっ♡こんなのっ♡やめさせてっ♡ばあ♡」

触手にクリトリスをゴシゴシと擦られながらなんとか抗議すれば、ディートリヒはうつとりと目を細めた。

「いつも威勢がいいのに、キミはすぐに気持ちよくなるな。いい加減認めたらどうだ。俺の手で開発されたいやらしいカラダで、他に嫁ぐ先もないだろう。キミは俺の側で笑ってればいい。キミが素直になれば俺だってもうこんなことはしないと誓おう。なあ、いまからでも思い直して夫婦としてやっていかないか」

低い声にハチミツのような甘さを含ませて、ディートリヒは語り掛けてくる。ずちゅずちゅ♡と卑猥な音を立てられながら敏感な場所を弄られると、思わず流されそうになつてしまいそうになる。

「ふ、ざけないでっ、あなたと結婚したのは、両親と、弟とっ、いもうとがつ、あなたのことを気に入ってたからっ♡それいじょうのりゆうなんてないっ……っ♡お♡」

ディートリヒを突き放すと、突然クリトリスを触手に弾かれた。強い刺激に思わず喉を晒せば、それが気に入ったとみなされたのか、触手がムチのようにしなり膨れ上がった肉豆をペチペチと叩き始める。

「っ♡やっ♡らんぼうにっ♡しないでっ♡」

ぷくっ♡と腫れあがった肉芽をぺちぺち♡と何度もリズムカルに叩かれる。クリトリスをピンタされるとじいん♡と肉芽が火照って、全身に気持ちいいのが広がっていく。同時にペチペチ♡と乳首も突起で叩かれて、おなかの奥が切なくなってこぼりと愛液が湧き出ていく。

「っ♡あたま、びりびりしゅるっ♡これっ♡きもちいい♡あなたがこいつに弱い場所、おしえたんでしょっ♡ひきょうものっ♡ひきょうものお♡」

ディートリヒをなじると、触手がにゅるんと眼前に迫ってきてそのまま口をこじ開けてくる。口腔を軟体で埋められて苦い汁を流し込まれながら喘ぎ声を封じられて、視界が滲む。必死に鼻で呼吸している間も、触手たちはしなりながらぺちぺち♡と上下の敏感な突起をいじめてくる♡

頭がぼうっとしているのに、気持ちいいのだけが鋭利に伝わってくる。太ももが突っ

張って、おマンコが一層熱くなって震え始める。切ない痺れが全身に広がって、腰がガクガクと跳ね始めた。

——イキそう♡

思わずぎゅっ♡と目を閉じたのに、予想した絶頂はやってこない。それなのにその手前で気持ちいいのが止まって、壁を打ち破れない。目を見開いていると、口の粘膜を埋めていた触手がにゅるりと離れていく。肩を震わせながら呼吸しながら、ディートリヒを睨みつけた。

「なんっ♡なんでえ♡またみょうなまほう使ったでしょっ♡イケないっ♡こんなにっ
なってるのにつ♡なんでイケないのお♡」

クリトリスも乳首も、布のしたで真っ赤になって腫れあがって素直に快感を拾ってる♡触られるたびに頭のナカがジンジンと痺れて、ピクピク♡と肉土手が震えて奥が狂おしく切ないのに、イケない。あと一步のところまで気持ちいい濁流がきてるのに、薄い

木の板一枚で無理やりせき止められる。

「は、イキたいのかミア。おぞましい触手にいいようにされて、無様にイキ潮まき散らしていききたいのか？」

冷たい声にぞわりと背筋が震える。おそろしさすら感じるのに、痴態を見られていると思うと、カラダの奥が切なくなってしまう。イけるなら、大きく雁首が張り出たチンポで、膣壁をごりごりと削ってほしいとすがってしまいそうになる。

「つつ♡イキ、たかないっ♡うづっ♡イキたいっ♡どれだけわたしをかき乱してっ♡ばかにすれば♡きがすむのっ♡」

ぺちぺち♡べちっ♡

ひととき大きく触手がしなり、パンパンに腫れたクリトリスを叩く。甘い痺れが脳裏で渦巻いて、でも弾けてくれない。尿意に似た感覚が腰を重くして、せり上がってくる。

「ふっ♡ふうっ♡ふーっ♡こんな、こととして、わたしを屈服させようとしてっ♡わたし、

今日こそは、まけないからっ、あっ?!」

にゆるんっ♡とショーツの隙間から入り込んだ触手が、どろどろに濡れそぼった秘裂をぬるりと撫で上げた。

「ひぎゅっ♡あ♡あ♡あ♡やめ♡擦らないでっ♡」

ぬるぬるの突起に秘裂をねっとりと擦り上げられて、クリトリスの裏側を突起でズリと擦られて、瞼の裏が点滅する。

「あ♡あがっ♡それっ♡やああ♡」

ぷしっ♡ぷしやあ♡

こらえていたのにぷしぷしと透明な液体が吹き出てしまう♡食い入るように見られながら潮をまき散らす無様な真似なんてしたくないのに、とまらない♡絶頂手前の快感が頭をずつとぐるぐるしているのに、潮まで噴いてるのにイケないっ♡絶頂すらできないのにお潮を漏らすカラダ♡絶頂できない苦しさに、恥ずかしさまで加わって混乱してし

もう♡

「みないでっ♡ぐっ♡もっ♡イボイボでおマンコずりゆずりゆするなあ♡ああ♡も、な
んでこんなひどいことしゆるのっ♡ひどいい♡」

ガクガクとカラダを震えさせながら、睨みつけることしかできない自分がみじめなの
に、舐けられた身体は従順に膣穴を疼かせてしまう♡イボイボでハグするみたいに触手
がすっぽりクリトリスを覆って、ずりずりされるたびに腰が無様にへこつく♡

ディートリヒはあくまで涼しい顔をしているが、瞳の瞳孔が広がって興奮しているの
がわかる。ズボンの下から、わずかに右に曲がっている肉竿の形がくつきりと浮き出て
いて今すぐにでもわたしにぶち込みたがっているのがわかる。

屈するわけじゃない、と何度も言い訳して身体を開いてきた。たとえ今日が結婚初夜
であっても、それは変わらない。

「っ、も、イカせてえ……♡もう、十分いじめたでしょう？」